

かたりべ119

豊島区立郷土資料館・ミュージアム開設準備日より



1：蔵出し展会場写真 ケース内の中央は寺田政明が描いた《小熊秀雄像》。その右は小熊の描いた《寺田政明像 (1)》。



2：小熊秀雄《激情（自画像）》、1930年代、インク・紙
 中：小熊秀雄《夕陽の立教大学》1935年、油彩・カンヴァス
 左：寺田政明《小熊秀雄像》1935年、水彩・インク・紙 掲載は全て豊島区蔵
 ＊《夕陽の立教大学》については『かたりべ』94号に作品解説があります。

蔵出し！展と小熊秀雄 おくまひでお

本年一月二九日から二月五日まで豊島区庁舎センタースクエアで開催した「蔵出し！としまコレクション」収藏品展2016には、多くの皆様にご来場いただき、ありがとうございました。

豊島区の美術作品といえ、まず最初に小熊秀雄の《夕陽の立教大学》が挙げられるでしょう。区の所蔵品第一号であり、池袋モンパルナスを象徴する作品として知られています。今回は新たに収蔵した作品を多くご覧いただき、《夕陽の立教大学》は展示しませんでした。小熊秀雄も重要な作家ですから、顔をクロローズアップしたコーナーに作品を並べています（図1）。

小熊の風貌を伝えるものとしては、ほかに《激情（自画像）》というインクで描かれた作品があります（図2）。ガラスに自らのこぶしを打ち込み、血を飛び散らせているもので、これは池袋の行きつけの飲み屋の看板娘に袖にされたための行動だと言われています。本作も、作家たちが行き交い、熱気が渦巻く池袋モンパルナスの雰囲気伝えてくれる作品といえるでしょう。詩人でも絵かきでもあった小熊の油彩作品は、ほんの数点しか現存していません。一方で、紙にインクで速写したこのような作品は、劣化しやすく取り扱いが難しいのですが、比較的多く残されています。

なお、《夕陽の立教大学》は現在、「画家の詩、詩人の絵」という展覧会でご覧いただくことができます。四月九日から六月一二日まで足利市立美術館で、その後小熊の出身地北海道では函館美術館に巡回します。所蔵品は、こうして旅に出ることもあるのです。

（美術・小林）

実施報告 企画展「蔵出し!としまコレクション」好評のうちを終了しました!

豊島区ミュージアム開設プレイベント第3弾「蔵出し!としまコレクション」収藏品展2016」は、美術、文学・マンガ、郷土資料の3分野合同の初展覧会として、一月二十九日(金)～二月五日(金)、区庁舎一階としまセンタースクエアにて開催しました。九日間で延べ三、六三四名が来場されました。

会期中は小学校三年生(一〇校六六六名)が郷土学習の授業で「むかしのくらし」の展示見学と体験学習を行い、連日大賑わいでした。会場ではクイズ&スタンプラリーを実施し、子どもから大人まで楽しめる参加型の展示も試みました。

また①ギャラリートーク、②大八車・天秤棒・足踏みミシンの体験、③蓄音器のSP盤レコード鑑賞、④紙芝居「ちいさい桶」の実演、⑤昔のおもちゃで遊ぶ、⑥美術展示のナイトツ



鈴木信太郎記念館プレ展示

ア、⑦坪田譲治文学特集展示(中央図書館)などイベントも連日実施し、刊行物や絵はがき、クリアファイルなどのオリジナルグッズも販売しました。アンケート(回答数一五八)をみると、四〇代と六〇代が各20%強、五〇代と七〇代が各18%で中高年の世代が80%を占め、ひとりでの見学が63%と多く、続いて親子12%、夫婦11%でした。

また区内在住が40%、区外二三区在住が38%と近隣からの来場者が多く、企画展を知った理由として「知人・友人の紹介」21%、「たまたま通りかかって」21%、「チラシを見て」18%の順でした。

二〇代・三〇代の若い世代の関心を集め、より広く効果的にPRするためにはインターネットや口コミの活用が重要だと感じました。展示内容について「大変は、「大変よかった」



美術分野展示

61%、「よかった」37%と多くの方から好評をいただきました。会場内の「新しいミュージアムへのメッセージコーナー」に寄せられたメッセージ(一三三枚)とあわせて見学者の声を一部ご紹介いたします。



◇スタンプリリーや触れる展示があり、子連れでも楽しめました。(40代)

◇池袋モンパルナスの各作品を初めて見ました。作家の思いや絵の力強さに魅了されました。(50代)

◇山高登氏の(「びわの実学校」)表紙画にとっても感動しました。

◇終戦後の池袋駅周辺の写真、小学校教科書等貴重な記録を拝見出来、良かった。この様な収藏品を是非次世代に残し学習させてほしい。(70代)

◇鈴木信太郎記念館がオープンする際に詳しい展覧会を希望します。(50代)



文学・マンガ分野展示

◇限られた空間の中で楽しめるように展示されていた。歴史の解説がわかりやすい。(50代)

◇美術と、暮らしと、文学と、豊島区に愛着がわく大変すばらしい展覧会だと思います。(30代)

◇豊島区はよく(池袋)モンパルナスが取り上げられている割に、ちゃんとした美術館がないのが残念。(50代)

◇期間が短くもったいない。恒常的な展示の必要性を強く感じた。(50代)

◇豊島区ミュージアムの早期実現を願います。(50代)

今回の企画展の成果と課題を、今後の新館準備に活かし、区の文化遺産の継承と公開に努めてまいります。寄贈者・関係者の皆様をはじめ、協力者の皆様に改めて御礼を申し上げます。(郷土 横山)



郷土資料分野展示

セピア色の記憶

第32回 空襲にも耐えた都電大塚車庫のおはなし

左に示した二枚の写真は、ほぼ同じ地点から撮影した一九六〇年前後と現在（二〇一六年二月撮影）の豊島区南大塚二丁目三六番街区付近の様子です。地図に示した*印は撮影地点を、↓印は撮影方向を示しています。

この街区には、現在、都営南大塚二丁目アパート、区立南大塚ホールをはじめ、東京都と豊島区に関連する諸施設がありますが、今から五〇年ほど前には都電大塚車庫が所在していました。

まだ「市電」の時代、一九二五（大正

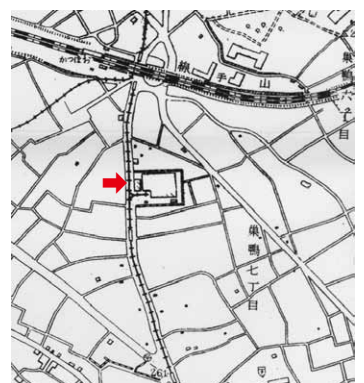


一四）年に大塚車庫は完成しました。車庫営業所は赤レンガ造りの三階建てで、当時としては堂々とした目立つ建物だったと思われます。「大正時代に造られた車庫営業所の建物は重厚な赤レンガと御影石造りで、天井が4メートル以上ある本格的な西洋建築でした。建物表面のルネサンス風レリーフやアーチ形エントランスなど、子供の私の目にもとてもエキゾチックで、映画やテレビで見える『外国』そのものでした。」とかつての思い出を語る人もいます（ウェブサイト「電車小



僧の写真館」所収「大塚今昔」より）。

また、かつて豊島区内にあった都電東鴨車庫と駒込車庫が戦災によって建て替えを余儀なくされたのに対して、耐火建築だった大塚車庫は、戦時下の空襲を耐え抜きます。そして、一九七一年三月に車庫としての役割を終えるまで、一六系統（大塚駅前―錦糸町駅前）と一七系統（池袋駅前―数寄屋橋）の車両基地として機能しました（いずれも一九六二年を基準、また一七系統は一九六九年一〇月廃線）。つまり、現在の都バス「都02」



焼け残った車庫営業所（1945年震災復興図（部分）『豊島区地域地図 第4集 改訂版』2011年より）



都電大塚車庫営業所（1971年3月17日撮影）

ちなみに、現在休館中の郷土資料館の仮事務所は、まさにこの都電大塚車庫跡地の一面にあります。（郷土 秋山）

資料のデータベース化 ～ようやくこまでできました！～

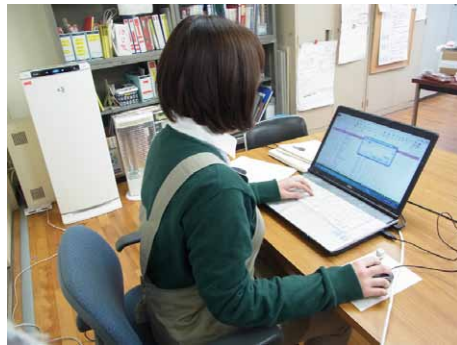
あれを見たい、これを研究したい、それを教材にしたい等の要望に応えるため、郷土資料館では、資料を活用しやすい形にすることに努めてきました。一九八四年に開館し、現在までに収集した資料のうち約三万点の資料は、旧第十中学校(千早四丁目)にあり、二〇〇八年から、調査員と本格的に取り組んできました。

今回は、その作業に携わった調査員の「ひとこと」を紹介します。表だった場所での仕事ではありませんが、何もないところから生み出した資料のデータベース化が、今後、有効に活用されることを願うとともに、資料の保管を、真剣に考えなければならぬ時期にきていることも痛感しています。(福岡)

■薄暗い廊下と教室に、ところせましと収められたさまざまな資料。収蔵庫として利用されている旧校舎での作業ということで携わらせていただきました。これからも、連綿と受け継がれていく郷土の歴史や文化にかかわっていただけることを、楽しく、また、嬉しく思います。(山崎)

■展示会で、「よくここまで集めましたね」と展示資料を見た見学者の声が、印

象深く残っています。ですが、収蔵庫には展示した資料の何十倍もの資料が収蔵されています。膨大な資料のなかから、折々の展示に適した資料を選択できるのは、先輩の調査員の方々が継続した成果で、調査員として間近で学び携わっていることを嬉しく思います。(上田)



データベースから資料を検索する様子

■多くの農具が収蔵されています。現在の都市化した豊島区からは想像もできませんが、むかしは農業地帯だったのです。今は失われたものを調査し、保存していくことに遣り甲斐を感じています。(太田)

■「虫にも負けず、カビにも負けず、夏の湿気にも冬の乾燥にも負けない、そういう調査員でありたい」(佐久間)

■カタ、カタ、カタ、カタ・・・ほとんど見られなくなってしまった足踏みミシン。企画展での実演では、多くの方になつかしんでもらったようです。もちろん初めて目にする小学生もいました。わたしが使っていた・・・母親が・・・祖母が・・・と、自分と関係する人とのさまざまな思い出と一緒に、実演するわたくしのところで話してくれました。(中野)

■思い返すと、資料整理の道具が無い、資料を収蔵する棚が無い、作業する仲間と試行錯誤の業務だった気がします。多くのことを資料から教えられ学んだ整理作業。携わった人たちの努力で、資料の名称を入力すると、収蔵場所・保管状況が一目でわかるようになってきたデータベース化。今後、資料の活用が広がるといいと思います。(広瀬)



ナンバリングされた棚やケースに資料が収蔵されている

■寄贈されていた大八車は、一部の部品(車輪のオトシ)がなかったため、世田谷区立次大夫堀公園民家園の「鍛冶の会」に製作していただきました。他館との協力を経て動くようになった大八車は荷物載せて公開され、希望者が曳くまでになりました。もの自体だけを残すのではなく、動いていた記憶も残していきたい、と心から感じた瞬間でした。(松浦)

■資料の水洗いは、全ての資料で行うことはできませんが、たまった埃や汚れを取り去ることで、資料は見違えるほど綺麗になります。資料が綺麗になると、収蔵庫も清潔に保たねばならない等、思い知らされることばかりでした。資料の保存に対して、積極的に実践できるといった環境にいたことは、我々や資料にとってもよいことであると思います。(三村)

■調査員の中で一番年少のわたくし。民具資料をさわるのは初めてのことでしたが、先輩調査員の助言に支えられ、資料とともに大きく成長することができました。春から大学院へ進学しますが、データベース化作業で培ってきた経験を活かして、まだ見ぬ資料たちとの出会いに胸をときめかせ、こつこつと成果を発表していきたいです。(山本)

〈郷土資料館〉



旧鈴木家住宅の「茶の間・ホール棟」は、一九四五（昭和二〇）年四月十三日の城北大空襲によって焼失した木造母屋の跡地へ一九四六（昭和二一）年に建設されました。建物は木造平屋建てで、間取りは書斎棟と隣接する南東側に応接室を兼ねた玄関ホール、書斎棟の二階へ上がるための階段室、南西側に茶の間、北側に台所、便所、浴室などの水廻りが設けられています。（図1、2）



図1 「茶の間・ホール棟」外観

空襲により母屋が焼失した後、しばらくの間、鈴木家の人たちは、書斎棟で生活をしましたが、書斎棟も入口の防火扉

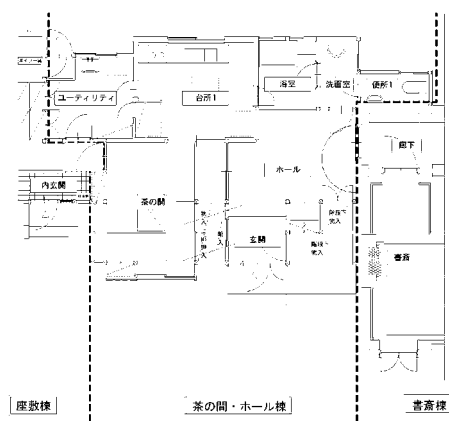


図2 「茶の間・ホール棟」平面図

が開かなくなる等、不便な点も多く、新たな住居の建設は急務でした。そこで、信太郎は、空襲の一ヶ月後には書斎棟の二階を設計した建築家の栗谷鶴二に設計の相談・依頼を行い、同年十月には茶の間・ホール棟の設計図が作成されます。しかし、終戦直後の住宅事情は深刻な状況にあり、一九四五（昭和二〇）年十一月に戦時中に設けられた各種建築統制は効力を失ったものの、住宅を建設するには多くの制約がありました。まず問題となったのが住宅面積の制限です。一九四六（昭和二一）年五月に「臨時建築等制限令」が公布され、十五坪（約五十平方メートル）を超える住宅

の新築・改築・増築が規制されます。茶の間・ホール棟の建設時期は公布前ですが、必要最小限の諸室を十四坪二合三勺に収めたコンパクトな設計がされています。

また、建築制限以上に問題となったのが、深刻な建築用資材不足でした。当時、購入できる材木は住宅一軒につき三十石（約八、三四立方メートル）に制限されており、価格も高騰していました。

そこで信太郎は、縁故の材木商である仲本昇太郎を通じて信太郎に加えて弟と娘婿の名前を借用して、三軒分の材木を手配することで、資材不足の中、良質な材木を使って茶の間・ホール棟を建設します。この際、書斎棟入口の防火扉も修理され、二棟を行き来することができるようになりました。



図3 玄関ホール内観

しかし、材料と職人の調達は出来たものの建物の内部までは手が回らず、壁は下塗りの荒壁のまま、床と天井も下地板のまま、仕上げが行われたのは、約十年後の一九五六（昭和三一）年でした。このような、深刻な住宅事情の中で建築家に設計を依頼し、三軒分の資材から選りすぐった材木を使って家を建てたことや、限られた面積の中で接客空間であるホールを広く取っていることから、将来の増築を見据えて、計画的に茶の間・ホール棟を建てようとしていたことが伺えます。

茶の間・ホール棟は、現在に至るまで書斎棟二階への階段の設置の他、台所の増築や水廻りの設備更新が行われた程度で、竣工当初の姿を良く残しています。こうした終戦直後の復興建築は、高度経済成長期を境に大半が建て替えられてしまい、現存する事例は少なく、非常に貴重な事例といえます。（郷土 木下）

「旧鈴木家住宅」は、豊島区東池袋五丁目に所在する歴史的建造物で、正確には「豊島区指定有形文化財（建造物）旧鈴木家住宅」という名称です。現在豊島区では、この建物を改修・整備して「（仮称）鈴木信太郎記念館」を開設する取り組みを進めています。

豊島区ゆかりの作家たち

豊島区では、戦前から今日まで著名な作家たちが暮らし、集い、活発な創作活動を続けています。大衆文学、詩歌、児童文学、童謡、童画、マンガなどジャンルは多岐にわたり、ゆかりのある主な作家だけでも百名以上になります。このコーナーでは、ゆかりの作家ひとりひとりを紹介します。

探偵小説家 大下宇陀児

【宇陀児の生い立ち】

今年、生誕一二〇年、没後五〇年を迎える探偵小説家の大下宇陀児は、一八九六（明治二九）年一月二五日に長野県上伊那郡箕輪町に生まれました。九州帝大工学部を卒業後、農商務省の臨時空素研究所に勤務する傍ら、一九二五（大正一四）年四月、雑誌『新青年』に処女作「金口の巻煙草」を発表します。宇陀児より二年先にデビューした江戸川乱歩らと共に、日本の創作探偵小説の勃興期から活躍し、「市街自動車」や「蛭川博士」等の作品を次々に発表、一躍人気作家となります。全盛期には一か月で最高二七〇枚の原稿を執筆し、これまでに長短編合わせ三百作品以上を発表しています。

創作活動以外にもNHKラジオ「二十

の扉」のレギュラー解答者を務めるなど、幅広く活躍しました。

【豊島区の大探偵小説家】

宇陀児が池袋の東口（雑司ヶ谷五丁目）に転居してきたのは、一九三四（昭和九年）のことでした。以来、三十年間にわたり、同地に住み続けます。偶然にも時を同じくして池袋の西口（池袋三丁目）には江戸川乱歩が転居してきます。二人の自宅は徒歩一五分ほどの距離にあり、宇陀児は犬の散歩がてら乱歩邸に立ち寄り、乱歩も宇陀児の家に訪れては将棋を指すなど、両者はお互いの家を行き来して交流を深めました。



1955年、本牧亭怪談の夜にて。宇陀児(左)と乱歩(右)
木下里美氏提供

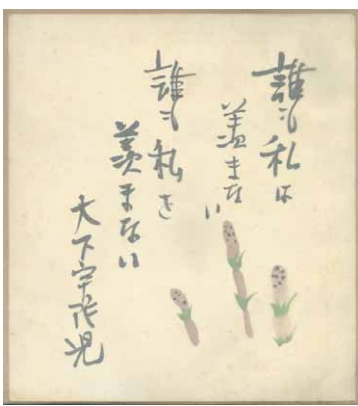
【感情の探究者】

宇陀児の作風は、社会風俗を巧みに取

り入れ、犯行動機や人間心理を丁寧に描くもので、犯罪小説の先駆となるような作品を数多く残しています。

乱歩は宇陀児に対し、「我々探偵作家の仲間で、感情や雰囲気興味を感じ、その取扱いに優れている点で、大下君の右に出ずるものはないように思われる。彼は一面では実に行届いた「人情」の作家であるが、同時に、日常的でない、尋常でない「感情」への広い範囲に亘った熱心な探検家でもある。」（『読売新聞』一九三五（昭和十）年四月三十日）と評しています。

〈誰も私は羨まない誰も私を羨まない〉これは、宇陀児が色紙に書き記した言葉です。この言葉には、ミステリー（謎）の要素が重視される探偵小説界において、人間の感情を追及することを信念とし、独自の路線を突き進んだ宇陀児の想いが表れています。（文学・マンガ 安達）



右下のつくしの絵も宇陀児自身が描いた。
個人蔵

編集後記

『かたりべ』一一九号をお届けいたします。郷土資料館が休館し、事務所が南大塚に移転して、はや三か月が経ちました。

実のところ、去る一月二九日より二月五日まで、本庁舎としませんタースクエアにて「蔵出し！としまコレクション」収蔵品展2016」を開催し、職員はそちらに出向しておりましたので、ようやく慣れてきたところです。また、区民の方々にも「郷土資料館仮事務所」（南大塚二二二六）はまだ馴染みのない場所かもしれません。

一方、これまで郷土資料館で行っていた小学生の郷土学習「むかしのくらし」展示を、勤労福祉会館ではなくセンタースクエアで実施したため、こういった展示を初めて観覧されたという方が多く見受けられました。また、南大塚の地域文化創造館で開催した「豊島ミュージアム講座」にも、初めて参加された方も少なくありません。

博物館は、「地域の蔵」として常置されることが前提となりますが、時にはいつもとは異なる場所で展示や講座を行い、新しい方々に見て知っていただくことも重要なことであると、改めて感じた今日この頃です。（編集 高木）

かたりべ
No.119

2016年3月25日

豊島区立郷土資料館
(休館中)

東京都豊島区西池袋2-37-4
豊島区立勤労福祉会館7階

電話 03-3980-2351

URL: <http://www.city.toshima.lg.jp/bunka/bunka/shiryokan/index.html>